

スクミリングガイ

平井 剛夫



ハスに産み付けられた卵
(撮影:池田二三高氏)



秋に水田が乾くと潜ろうとする性質があり、越冬できる個体もいる。

スクミリングガイは南米ラプラタ川流域を原産とする淡水性巻貝である。食用のために導入され、ペットとともに飼育水槽の掃除用としても利用されていたのが、逃げ出して、イネやハスなどを食害する水田まわりの有害動物になってしまった。最近DNA分析により、日本に生息するリングガイの大部分はスクミリングガイであるが、沖縄など一部地域ではラプラタリングガイも混在していることが明らかになった。

1980年代前半、西日本の九州沖縄地域での急激な発生分布拡大が問題となっていた。たんぼや水路に在る在来のタニシにくらべると、ふたまわりも大きいので、ジャンボタニシといわれて区別されている。イネやハスなどの茎や水路の壁面に産み付けられた卵塊の異様な鮮紅色(写真図1)から、この貝の生息を容易に確認することができる。

静岡県内では、1982年2月、伊豆の東伊豆町での養殖が始まって以来、ほぼ同じ時期、1983年(昭和58年)焼津市で野生化が確認され、1986年(昭和61年)にイネの被害が発生した。現在、焼津市、袋井市、富士市を流れる水系などでの生息が確認されている。この貝の食害の習性が水中に限られるため、田植え直後の、みなくち部分での深水になって、湛水で苗が水没すると、この貝による食害を受けやすい。イネの稚苗期や移植後の水管理が大切である。被害の顕著なところでは、登録のある薬剤もあるので直接的な防除対応は可能である。防除対応においては、県の防除所、農協など、担当窓口への連絡がのぞまれる。

冬期、湛水のない地表にいる個体は、静岡においても、秋期から初夏まで、じっと動かずほとんど活動しないで、低温のため、死亡する個体も多い。ところが、秋期、土壌中に潜ることのできる個体は、かなりの個体が、冬期間、生存できることが知られている。袋井市のハス田に越冬する本種を冬期観察することができた(写真図2)。また、貝のサイズにより耐寒性は異なり、殻高1~2cm程度の貝が最も越冬率が高いことがわかっている。土壌表面では、-3℃ではほとんどの個体が3日以内で死亡してしまうことが実験的に確かめられている。本州では茨城県以北では越冬ができないことが、それを裏付けている。

水田内のイネ以外の植物、死んだ魚介類や植物残渣を摂食し、短期間に多数の卵塊を産む高い繁殖能力をもつために、いまだに水田の作物に被害をもたらす有害な生き物であることは確かである。また餌だけでなく、個体間でも誘引することが観察され、メスには水中に溶けて同種のオスを誘引する物質、すなわち性フェロモンを生産していることがわれわれの共同研究で確認された。このような本種のもつ誘引性を防除に用いる方向も期待される。